

富士川游が語る「宗教の心」―女性誌「精神文化」の講話―

島野達雄

武田科学振興財団・杏雨書屋所蔵の『富士川游先生稿』（乾々六九二）は、医学・医史学の泰斗として知られ、「科学者であり哲学者でありながら、徹底した宗教人」（遠山諦観）という稀有な存在であった富士川游が、女性のためにおこなった宗教講話の自筆原稿である。

晩年の富士川は講話を好み、側近の一人によれば、「宗教の講話も、この頃は系統立った論述は稀まれになって、随筆的な譚はなしを諄々じゆんじゆんと愉たのしみて話されるといふ風であった」という。

原稿は、「宗教の心」が、どのようなとき、どのようにして人々の胸にわき起こるかを述べている。

ここでは、『富士川游先生稿』を中心にして、富士川が創設した「婦人精神文化研究会」の機関誌「精神文化」に掲載された講話を抄出する。

浄土真宗土徳の地、安芸あきの国（広島県）に生を享け、安芸門徒の風土のもとに育った富士川が、女性たちに伝えようとした「宗教の心」とは何であったのか。おのおのの講話にそって、若干の解説を試みたい。

旧字体の漢字は通用字に改め、古典を除いて、仮名遣いには現代のものを採用した。「」は翻刻者の注記を示している。

徒然草

女性のための月刊誌「精神文化」は、中山文化研究所（大正十三年創立。所主は中山太一大阪太陽堂店主）内に、所長の富士川が創設した婦人精神文化研究会の機関誌として、昭和四年（一九二九）四月に創刊された。

当初の「真実の教おしえ」シリーズに見られるように、創刊以来、一貫して富士川の宗教講話を掲載し続け、戦火の拡大にもなって、昭和十九年（一九四四）八月に休刊するまで発行が続いた。

「徒然草」のシリーズは、太平洋戦争開戦の前年、昭和十五年（一九四〇）八月三十一日発行の「精神文化」第十三卷第一冊に第一回が掲載された。

その「はしがき」で、「今私はこの書の文学的価値を云々しようとするのでなく、特にその中にあらわれたる兼好法師の宗教の心を見ていこうと思うのである。それ故に『徒然草』の中に宗教味のある章段の文句を抜いてそれにつきて私の考えを述べるのである」としている。

たとえば題名の由来となった序段「つれづれなるままに」では、最初に、『徒然草』の本文（以下では『』でしめす）を掲げ、次に現代文による訳解を明らかにし、最後に「私の考

え」を述べるといふ三段階の構成となっている。

序段は、必ずしも「宗教味のある章段」とは言いがたいが、富士川が読みやすさに配慮した例として示しておこう。

序段

『つれづれなるままに、日ぐらし、すずりにむかひて、

心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、怪しうこそものぐるほしけれ』

退屈にまかせて、終日、硯すずりに向かって、我が心にそれからそれと浮かんで来るタワイもないことを、その浮かぶままに目的なしに書いてみると、変に気が違っているように思われるという意味である。

兼好法師がこの「徒然草」を書いたのはその齡よわい、四十歳の末から五十歳の始め頃であったと思われるが、それは既に人生の経験を積みて、しかも静かに自分の生涯をふりかえって見ることの出来る年頃であるから、一室に座して静かに考えると、今まで経験した多くのものが、かずかず心に浮かび来るに違いない。そういうところから考えてみると『徒然草』は人生の酸すいも甘あまいも嘗なめ尽つくし

た白髪の老翁が、まだ経験のない若人を前にして自分の体験を語るような渋味しぶみがあるのである。

この文章を記した富士川は七十五歳。「静かに自分の生涯をふりかえって見ることの出来る年頃」であった。

富士川は「白髪の老翁」を自身に重ね合わせたのであろう。

連載第一回到抜き出された「宗教味のある章段」は、序段のほかに、第一段「法師ばかり羨うらやましからぬものはあらじ」、第四段「後の世の事、心にわすれず」、第七段「あだし野の露消ゆるときなく」であった。

第四段の「私の考え」にあたる部分に、連載第一回の各段を要約するような文章が添えられている。

兼好法師は無常を説き、悟道「悟りを開く道」を勤める傍かたわら、人間の悩みに同情し、現実の娯楽おんがをも謳歌おうかしているが、しかも此の世に存在する美しい生活を抑おさえて、「我々人間は現在の世のみに生きるものでない」と痛言つうげんしている。まことに簡潔の文字にして、しかもよく宗教の価値を示し得たものである。

「徒然草」の連載は、富士川の死去にともない、二回だけで

終了する。その最終回の原稿こそが、杏雨書屋に残る『富士川
游先生稿』である。

以下、富士川が生涯の最期に、兼好法師の心のなかに見つ
けた「宗教の心」をながめてみよう。

第十七段

『山寺にかきこもりて、仏につかうまつるこそ、つれづ
れもなく、心のにごりも、きよまるこちすれ』

自分の家において是非せねばならぬというような用事
の無いとき、退屈して何事もやる気になれず、何となく
無聊ぶりように苦しむことがあるものである。

しかるに、山寺に籠こもって仏の前に経を読み、念仏を申し
ておれば、そういう散漫なる気分にもならず、煩惱の心
けがれも無くなってしまうような気もすると言える兼好
法師の心は、旅をすれば気分が新しくなるというような
趣味的なことすていでなく、山寺にいて、華を供え、経を誦ずしな
どして仏に仕つかえるときは、家において退屈たいくつするようなこと
なく、心の中の濁にごりが拭ぬぐい去られるような気がすると
言いう。これまさに宗教の心のあらわれである。

ここでは、兼好法師が言わんとするところを丁寧に説明し、
その中に宗教の心を見いだしている。

言いかえれば、科学者がこれまで知られていなかった法則
を新たに発見するように、『徒然草』という素材の中に、宗教
の心を発見している。

仏教の意味から言えば、退屈して何事をする気もない
ことも一つの煩惱ぼんのうである。煩惱といえは食欲・瞋恚しんい「怒
り」・愚痴ぐちの三毒の心のみに限ると思うは誤りである。そ
う積極的の醜悪しゅうあくなる心のはたらきと同じように、何の為
すこともなく、無聊ぶりように苦しむということも、煩惱の心のは
たらきである。

しかるに、仏に仕える心はたらきて、そういう煩惱が
あらわれず、心の濁にごりが拭ぬぐい去さられたような感じがする
というのは、まさしく宗教の心のはたらきである。

富士川は、「精神文化」に宗教に関する各種の連載をはじめ
るとき、必ずと言ってよいほど、「わかりやすく平易へいに述べる」
と宣言している。

婦人精神文化研究会や精神文化という言い方には、いかめ
しく難しい響きがあるが、富士川は、「真宗とは、仏教は真実

の宗教であるというほどの意味、「信ずるとは疑わざること」「南無阿弥陀仏は、心を込めて『お母さん』と呼ぶようなもの」と、言いかえや比喩を用いてわかりやすく説明をしている。その意図を汲めば、読者は、兼好法師の「心の中の濁りも清まる心地」を感じとるだけで良いのであろう。

第二十段

『なにがしとかやいひし世捨人の、「この世のほだし」「つながり」もたらぬ身に、ただ空のなごりのみぞをしき」といひしこそ、まことにさもおぼえぬべけれ』この第二十段でも、兼好法師がおこなった「自然の森羅万象に対する、敬虔なる思索」のなかに、「宗教の心」が発見される。

短い文章であるが、世の中に羈絆「きずな、束縛」というものは何も持っておらぬ世捨人も、移り行く季節に残されたる自然の動的の興趣を見れども飽かぬ心を、美しく言いあらわしたものである。

詩人が自然につきて歌い、自然に対して自ら楽しむに異なりて、自然の森羅万象に対して敬虔なる思索である

ところに宗教の心が強く動いていることが認められるのである。

むろん富士川の洞察は、自然に対して自ら楽しむ詩人ばかりでなく、人の世の無常を詠んだ詩人にも及んでいる。

松尾芭蕉『更科紀行』には、目もくらむほどの高山のかけ橋を平気で渡る人々の姿を見て、ふと感じたところを詠んだ『かけ橋や 命をからむ 蕪かづら』の一句がある。

富士川は、「無常迅速の人生のかけ橋を平然とわたっている人々の愚かしさを挙げて、しかも深く自己をかえりみでの発句である」(『新選妙好人伝』昭和十一年)と、孤愁の詩人、芭蕉の心中をはかっている。

富士川は芭蕉を心の友としていたかのように、次のように語っている。

芭蕉は常に人と争わなかった。『物いへば 唇寒し秋の風』の句には、『人の短を言う事なかれ、己が長を説く事なかれ』と前書きがしてある。

もとより座右の銘であるが、芭蕉はみずからこれを実際に履行したのである。

第三十九段

『ある人、法然上人に「念仏の時ねぶりにおかされて行をおこたり侍ること、いかがしてこのさはり「障」をやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたらむほど念仏したまへ」と答えられる。いと尊かりけり。

また「往生は一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といわれけり。これも尊し。

また「疑ひながらも念仏すれば往生す」ともいはれけり。これもまた尊し。』

この一節は、浄土宗の祖、法然上人の専修念仏の教えに對して、「いと尊かりけり」「これも尊し」「これもまた尊し」と、兼好法師が感想を述べたものである。

富士川は、大正五年（一九一六）一月に上梓した『親鸞聖人』で、法然上人の教えを、非常に斬新なものと呼び、宗教界に一大革命をもたらした、としている。

法然上人は、形式を重視する当時の仏教の在り方を痛烈に批判し、ただ一心に念仏を唱えよ、と説いた。

此の文の意は、或人が法然上人に向いて、「どうも私は念仏を申す時にねむくなつて、つい睡に落ち、そのために

念仏の行を怠ります。このこと、どうしたら睡の障りを止めることが出来るでありませんか」と言ったところが、法然上人は答えて「ねむいときは、ねむるべし。ただ目がさめたら、その時また念仏申さるべし」といわれた。その言はまことに尊い。

又、法然上人の語に「極樂往生はきつと出来ると思えばきつと出来る。どうかわからぬと思うておれば、どうだかわからぬものだ」と言われた。これも尊い。

又「疑いながらも念仏すれば、極樂往生が出来る」とも言われた。これも又、尊い言葉である、との意味である。

法然上人が昇りつめた竿頭にあつて、さらに一步を進めたのが、親鸞聖人である。

婦人精神文化研究会での連続十二回の講話をまとめた、『親鸞聖人の宗教』昭和八年）では、法然上人以前の仏教の教えと、法然上人の浄土教、親鸞聖人の弥陀教、の三つが次のようにたとえられている。

法然上人以前の教え、すなわち聖道の教えは、たとえば暗夜の道を行くのに、自分で提灯を造るべきことを教え

るのでありますが、法然上人の浄土教では、暗夜の道を行く人に提灯と蠟燭とを貸し与えるようなものであります。親鸞聖人の弥陀教は尚進みて、その提灯に火を灯して貸し与えるようなものであります。

このたとえ話からは、親鸞聖人が仏教に「いのち」を吹き込んだことがわかる。

こうして浄土真宗で培った富士川の宗教観は、「すべての宗教」へと拡大してゆくのである。

すべて宗教というものは、人々の心の中の状態でありまして、言葉によりて、人から人に伝えらるべきものではありません。せぬから、どんなえらい人の説かれたことでも、それがそのまま、その人の宗教であるとはいわれぬのであります。そして、その人の説いたことを聞いた人の心持ちが、ある特別の状態をあらわしたときに、これを宗教というのであります。

仏教ばかりでなく、およそ宗教と呼ばれるものの心、つまり宗教の心は、一人ひとりの胸のうちにあることを、ここでは言っているであろう。「宗教の問題は、自分の心で深く考えなければ、講話を聞いてもさほど役にたたぬものであります」と

も語っている。

安心座談

次に、「精神文化」第十卷第十二冊（昭和十三年十月三十一日発行）の「安心座談」のシリーズに登場した二人の少女の物語を紹介しよう。富士川の「浄土真宗信者としての厳しさ」と合わせて、「優しく穏やかな心情」があらわれている小品である。

心の花（要約）

京都のある豪商が母堂の二十五回忌を営んでいるとき、下女のおさよが来客用の皿を落として割ってしまった。これを聞いた主人は大いに怒り、はげしくおさよを叱責した。

すると側にいた子守のおみつが進み出て、「いや御主人様、その粗相は私がいたしたのでございます。それをおさよさんが気の毒に思うて罪をかぶってくれたのでございます」と泣かんばかりに訴えた。

当の主人は、おさよとおみつ、いづれを叱ってよいかわからず、困惑して二人の少女に子細をただと、おみつが

言うよう、

「ご主人様、私がわるうございました。実は、今日という日は私のお母さんの一周忌にあたるのでございます。私は生前お母さんに何のつくすことも出来ず、何か功德を施したいものだと考えておりましたところ、私は夢中で、おさよさんの罪をかぶってあげよう。そうしたらその功德とやらでお母さんも浮かばれることもあるかと思うたのでございます」と両手をついてあやまるのであった。

話を聞いていた主人の頭もおおのずから下がり、憤怒の顔もやわらいで「ああ、そうであったか。この私は亡き母上の供養をしていながら、心は鬼であった。私の心は、この子守のおみつには到底及ばぬ」と深く感じ入ったのであった。

この物語に対して、富士川はこう述べる。

冥土にある母のために功德を積みその冥福を祈るということは、親鸞聖人以前の仏教には広くおこなわれたことであるが、それは真に宗教の心のはたらきを知って見れば何の意味もないことである。

富士川が「何の意味もない」と断言するのは、親鸞聖人以後

の仏教では、亡き母の供養のために人助けをすることを「功德」とは呼ばないからである。よりわかりやすく言えば、自分で善いと思つて人助けをしても、つまるところ、この善行を早く誰かに知つてほしい、と思う自我のなせるわざであるから、真の善行とは言えない、と指摘しているのである。

富士川は、やさしく穏やかに、こう続ける。

今そういうようなことは論外「言うまでもない」として、この子守娘のおみつがその母に対する感謝の心の厚いことはまことに美しい心の花である。

そうしてかように美しい心の花は猛き人の心をも動かすに十分なる心を有するものである。

宗教話藪

『富士川游先生稿』所収の「宗教話藪」シリーズの原稿の大半も、「徒然草」と同様に、「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に掲載され、それが最終回となった。

「宗教話藪」は、市井の人々の逸話から構成されている。これらの逸話は富士川の創作ではない。古くから人々のあいだで、語り継がれてきた物語である。もちろん考察は、富士川に

よるものである。

はじめに、よく知られた白隠禪師はくいんの公案こうあんを紹介し、「精神文
化」第十二巻第七冊（昭和十五年二月二十九日発行）の加筆部分を
示しておこう。

片手の声

禅宗の高僧の白隠禪師が説教中に、半ば右の手を上げ
て、「この片手に声ありや無きや」と、参詣さんげいの人に尋ねら
れたが、ただの一人も答うるものがない。

皆の人々は、あれが禅宗のさとりと見える、両手叩たたけば
ポンポンと音がするが、片手の声とは訳わけがわからぬと、互
いに顔を見合せて不審ふしんの眉まゆをひそめておった。

すると妙心という尼が、高座の前に進み出て、

白隠のあげて声あり片手より

両手合せて南無阿弥陀仏

とやった。

白隠禪師はこれを聞いて、「其方は真宗の門徒であろう。
感心なことじゃ。しかし片手の声は法然や親鸞の宗旨で
はわからぬぞ。それは禅宗の大悟徹底たいごていというものじゃ」と

言われた。

そうすると、妙心はすぐに、それに応じて、

片手にも声あればこそ招まねかれて

弥陀の浄土へ参まゐる妙心

と、一首の歌をよんだ。

大悲だいひの親様は十劫正覚じゅうこくしょうかくのむかしより呼びつめて待っ
てござる。右の御手おてがこの弥陀みだたのため、左の御手おてが必ず助
ける、その御呼声およびごえじゃ、と妙心の心には会得えとくせられたので
ある。

富士川の筆法ひつぽうをもつてすれば、最後の四行は、阿弥陀如来と
いう母親の呼び声が、妙心という子供の心に響いた、とでも言
えるであろうか。

こういうことは其の心が宗教のはたらきを十分にあら
わすようになりて、すぐに感知かんちせられることである。普通
の考えでは何のことかわからぬのが当然のことであるが、
宗教の心があらわれていれば、片手はおろか、世の中の
一切いっさいのものが法を説いていることが知られるのである。
其の法を聴きくことが出来るようになれば、この世は安楽
に、自由に、何等なんらの苦しみもなしに生活することが出来る

のである。

「世の中の一切のものが法を説いている」とする思想は、仏教に限らず、我が国古来の「あらゆるものに神が宿る」とする神道の考え方に近い。

富士川は、『親鸞聖人の宗教』で、「私は敢えて神仏を畏敬し、誠意の祈願を捧ぐることを無意味とするものでない」と述べ、みずからも、全国での講話の寸暇を惜しんで、熱田神宮、平安神宮、石清水八幡宮などに参拝している。

けれどもここで受けとめるべきは、神と仏の共存について論じる学問ではなく、白隠禅師の公案に当意即妙の和歌で応じた「妙心という一人の尼の心」である。

ここでは、妙心の心が、宗教のはたらきを十分にあらわし、世の中の一切のものが説いている法を聴いたことを明らかにしている。その法を感知するのが宗教の心であると主張している。

では、宗教の心が十分にはたらき、法を聴くことが出来るようになるには、何が必要なであろうか。

宇宙の声

一人の青年の病身なるものが、ある禅宗寺の和尚のところに接心「座禅」に来た。この青年は中々の理屈屋で、入室「修行」に来ては何とか理屈をこねる。

「うんと座って宇宙の声を聞いて来い」と誠められても、中々理屈を止めず、目も赤くなるほどに興奮して、

「こんなことなら帰る」と怒鳴って帰って行った。ところが最後の接心の日に来て言うよう、

「その晩、腹が立ってくやしいので眠れなかった。ただ幾度か、ねがえりをするばかりであった。すると母親が心配して、寒いのだろうから一枚かけてあげようと、蒲団をかけて下さった。

私はそのとき始めて母の慈愛の心がしみじみと感ぜられました。今まで幾度もこんな言葉を聞きましたが、本当の親の慈悲というものを知ることができませなんだ。母の愛さえそうでありましたら、仏の慈悲がわからなかったのも尤もなことでありました」

と、涙を浮べて慚悔「反省」したという。

自我執著じゆうじやく「執着」という垣かきが取り払はらわれるれば、法の慈悲はすぐに這入はいって来るものである。

最後の二行は説明を要するであろう。『富士川游著述選・第四卷』(昭和十六・十七年発行)の加筆を借りて、読み解いてみよう。

こういう風に自分ではたらく心持が強い間は、その奥にあるところの仏性ぶつじやうを見付けることが出来ませぬ。はじめからあったに違ちがいない親の慈悲が、自分というものを省かえりみない間は何とも思おもわなかつたのであります。

ところがこの青年は和尚わしやうに叱おこられて腹が立ったために夜も寝られないところまで来た。その時母親が蒲団を掛けてくれたので、はじめて慈悲を知しつたのであります。

即ち法を聴くということは、我を空むなしくしなければ起おこるものではありません。宇宙の声を聴けと言いわれたのは、一切のものが法を説といてるのであるから、それを聞きけということでありましょう。

ここでは、禪宗の僧が青年を叱しかっている。言いいかえれば、「一切のものが法を説といている」と考えるのは、先に述べたように、日本の宗教界の教派・宗派を問とわない考え方である。

その風土にあつて、さらに一步を進めて、「我を空おのれしくしなければ法を聴くことはできない」とする言葉は、まさしく「己おのれを捨て、弥陀「阿弥陀仏」の衆生しゆじやうを救うという本願ほんがん「誓ちかい」にすぎるといふ親鸞聖人の他力たうりきの本願の教えにもとづくものと言いえるであろう。

「己を捨てる」ための方法のひとつとして、富士川は、自己を見つめ直す内観(自省)を挙あげている。

勝澤一順

勝澤一順は福井藩の侍医、学を好み、医術のほか、詩文しぶんを巧たくみにし、和歌も上手であつた。

一順がかつて言いつたことに次のようなことがあつた。ちよつとしたことであるが、以もつて一順の心が人にすぐれて内省的ないせいであつたことが窺うかがわれるのである。

「召めいし使う下僕げぼくに文吉というものが有あつた。質朴しつぼくなる性質にて、余「私」の言葉に少しもさからいたることがなかつた。

或時あるとき、話の序ついでに、余が言いひしことを皆善よしと思おもひて、かくは従したがうにやと問といけるに、否いな、左様さやうにては候まうわず、

時には悪しきこともおわせど、主人なれば枉げて従い侍るなりと答う。

問えばこそやあれ、問わざりせば、自分は皆善しと思ひいるべきを」

もし問わなかつたならば、自分のいうことに間違ひがないと思つて一生過ごしたかもわからぬ、といったそふであります。

実に謙虚な態度であります。

富士川が内観の極致と感じたのが、親鸞聖人の『述懐和讃』にある「是非しらぬ邪正もわかぬこの身なり。小慈小悲もなけれど、名利に人師をこのむなり」という言葉である。

是非も知らず、邪正も分かぬこの身にて、小さい慈悲の心すらないけれども、名誉の心がつよいから、他の人を教え導こうとすることがやまぬのであります。まことに徹底して自分の価値を否定せられたものでありましよう。

至高の内観とは、この親鸞聖人のような心持ちを言うのであろう。

平生我々が善いとか悪いとかと申すのは、要するに自分の気に入るか入らぬかをいうのでありまして、しかも

それはいつも我より他に対して言うのであります。そうして自分自身をば決して導こうとはせぬのであります。

自分自身をば決して裁こうとせぬのであります。

なお、『親鸞聖人の宗教』の「はしがき」では、「題して親鸞聖人の宗教というも、それはもとより余「私」の心の上にあらわれたるものを指すのである。宗義を相承したというようなものではない」と、一人の信者としての心境を述べている。

勿体ない

この逸話には、親鸞聖人の法灯を受け継いだ浄土真宗中興の祖、蓮如上人が登場する。

「我と思ふ心」を捨てた女性の、「さりとは勿体ない」の一言が胸をうつ。

江戸のある儒者の家に、浄土真宗生れの下女があつた。明け暮れに仏の御慈悲を喜んでおつた。或時、主人はその女中に向いて言うよう、

「そちは善き阿房なり。何がありがたくて法談参りをするか。そちが信仰する蓮如上人は大の愚僧故、此の間も御文を見れば一の字に仮名つけするほどの愚僧なり。信ずる

に足らぬ」

下女はさめざめと泣きて、

「一の字に仮名つけて、あなたの御笑いなさるようなことをさせますは、この私ゆえでござります。それ御存じのない蓮如様ではござりませぬけれども、この一の字も知らぬ、はした「端下」な私を浄土参りさせたいばかりの思召で、恥も外聞も御かまい下されぬ。さりとは勿体ない」とて、泣きながら感謝したのであった。

『富士川游著述選・第四卷』の加筆を借りよう。

こういう心持ちというものは、我と思う心が出なければ誰にでも起きる心持ちであります。学問ならば勉強次第によつて深くも浅くもなるものでありますが、宗教の心はそんなものとは全く違うのであります。

昭和十五年（一九四〇）一月、「中山化粧品公会」で、富士川は、女性たちに向かって次のように述べている。

人間の世の中はすべて学問で始末がつくと思うのは大きな間違いであります。人間が生きておるといふことも、死ぬるのも又、不思議の力の中で死ぬのでありまして、それは学問の研究が如何に進んでも、解決のつくものでは

ないのであります。

宗教と申す心のはたらきは、人間の智慧のはたらきをやめて、我というものの値打ちをなくしたときに、誰でも感ずるところのよろこびの心持ちを申すのであります。

「精神文化」には、ほかに、延べ百人を越えるさまざまな職業・年齢の人々が紹介されている。

釈迦如来様と蓮如様とは同じ時代の人でござりますかとたずねた妙了尼。儒学者として仏教を排斥しながら、寺院のお札を大切に扱った荻生徂徠。地獄におちて火の車に乗っている自分の絵を寢室に掛けていた三州おみつ。患者を死なせてしまったことを恥として休業した嵯峨の意安こと吉田宗桂。泥棒に入られて感謝した大和の清九郎。南無阿弥陀仏というは阿弥陀如来の御名でござりますと答えた伊賀の三左衛門。講話に登場した人々は、富士川とともに、穏やかに語りかけている。

あなたに宗教の心はありますか、と。

解説

同じ広島県に生れ、若くして富士川游に師事した哲学者・科学史家の三枝博音は、「医家としての先生の生涯を通じて念頭を離れなかったものは、実に医術と宗教であったといつても間違いはないであろう」と述べている『富士川游先生』「再び学的労作への情熱」。

いま、富士川が医術すなわち医学界に残した鮮やかな足跡には多言を要しない。

『日本医学史』『日本疾病史』を始めとする数々の著書・論文は、学問上の業績として燦然と輝いている。

患者とその家族を苦悩から救い出す医師として、多くの雑誌を主宰する医学ジャーナリズムの第一人者として、同じようにドイツ留学を果し、同じように医学・文学の二つの博士号を得た森鷗外に比肩する著述家として、疾病を社会問題と捉える思想家として、漢方と西欧の医学との橋渡しをおこなった人々を克明に追いつけた歴史家として、膨大な医書・医史料の蒐集家として、十指に余る学会・研究会・医師団体の組織者として、医学界に身をおく人々のなかで、富士川の名前を知らない人はいないだろう。

同時に、中山文化研究所内に中山女性文化研究所と中山児童教養研究所を発足させ、女性や児童の健康の相談にのるという実践の人でもあった。

あるとき富士川は、「学問はかつてしたことがあるというのは本当ではない。学問は現にしているのでなくては、たいした意味はない」と述べたことがある。

富士川は、生涯を通じて、医学・医術と同じように、広く深く、そして峻巖しゅんげんに宗教に向かい合った。

『親鸞聖人』を世に問うた大正五年（一九一六）、五十一歳の夏には、「宗教のことに心を傾けていて、仏教ことに浄土真宗のことは三十年来、自分でかれこれと研究いたしております」と語っている。

『親鸞聖人』の最終章「科学と宗教」は、富士川の生涯を貫く研究テーマと言えるものである。

富士川個人にとつての科学と宗教、すなわち医学・医術の学問と浄土真宗の信仰は、二つながら最勝さいしょうの域いきに至っていた。とりわけ、その信仰は、自我を捨て、己おのれを空しくして弥陀の本願を受け入れる自然法爾じねんほうにの境地に達していたと言えるであろう。

それゆえに、その講話は、「心の花」に見られるように、すべての宗教の核心に迫る舌鋒ゼツポウの鋭さと、言い知れぬ優しさにあふれているのである。

『富士川游先生稿』は、生涯の掉尾トウビに、消えゆく灯火が一瞬の光彩を放つかのように執筆された。

ここには、有名無名の人々の、人間として「ふと、ものに感じる心」、「胸の奥底にひそんだ愚かさをかえりみる心」、「わが生を与えた父や母を慕う心」、「教えを説いた先人たちに感謝する心」が描かれている。

浄土真宗はむろん、すべての宗教に通じる「平和で穏やかな一人ひとりの心」が示されている。

国の内外において分断と対立の絶えない現代こそ、富士川游が生涯をかけて明らかにした「宗教の心」が活かされるべきではないだろうか。

参考文献

- (1) 富士川游『親鸞聖人』大正五年 国立国会図書館デジタルコレクション
- (2) 「精神文化」(昭和四年四月昭和十九年八月) 大阪府立中之島図書館
- (3) 富士川游『親鸞聖人の宗教』昭和八年 国立国会図書館デジタルコレクション

(4) 『新選妙好人伝・第二編松尾芭蕉』昭和十一年(『新選妙好人伝』昭和四十六年改訂新版)

(5) 『医術と宗教』昭和十二年(『富士川游著作集第二卷』昭和五十五年)

(6) 『富士川游著述選・第四卷』昭和十六・十七年 大阪府立中央図書館

(7) 『富士川游先生』昭和二十九年(昭和六十三年復刊)

(8) 『富士川游の世界―医学史、医療倫理、そして宗教―』令和三年 桑

原正彦・田畑正久編